

## ハンセン病をめぐる「啓発」は正義か

稲熊 爽太郎 内田 創己 坂井 南帆  
増田 祐太 水谷 真理子 山本 智佳

杏林大学医学部1年「地域体験学習」

### 概要と目的

ハンセン病は、らい菌への感染によって生じる感染症である。現在では治療法が確立されているが、過去には「恐ろしい伝染病」という誤った認識が広まり、患者の強制隔離などの政策が行われてきた。その結果、患者や回復者、その家族に対する偏見や差別、人権侵害が長期にわたり続いてきた<sup>1, 2)</sup>。

本研究では、ハンセン病に関する「啓発」をテーマとし、従来の啓発のあり方を「過去と未来」という時間軸と、「ポジティブとネガティブ」という影響の二つの観点から整理し、その意義と課題を検討した。

### 方法

まず国立療養所多磨全生園および国立ハンセン病資料館を訪問し、フィールドワークを実施した。そのうえで、ハンセン病の歴史的背景や啓発活動の変遷について整理し、「過去と未来」「ポジティブとネガティブ」という二つの軸から情報を可視化して、グループ内で共有・議論を行った。

特に、過去の報道や政策において感染の危険性が強調されてきたことが、人々の恐れや自分たちは間違っていないという正しさの認識と結びつき、差別の形成にどのような影響を与えたのかを検討した。また、現代の啓発についても、「当事者との対話」や「教育」といった意義がある一方で、「先入観の助長」や「人権・プライバシーへの影響」といった課題もあることを踏まえ、両面から分析した。

これらの議論をもとに、啓発の意義と課題を整理し、ポスター（図1）としてまとめた。

### 結果と考察

本検討から、過去の啓発や政策の背景には、「感染する

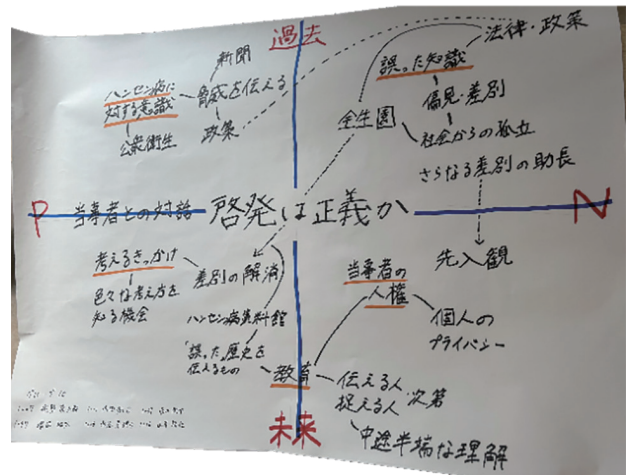


図1 発表ポスター

かもしれない」という不安や、「自分たちは正しい行動をとっている」という認識があったことが示唆された。こうした意識のもとで隔離政策が正当化され、誤った知識の拡散や偏見・差別の継続につながったと考えられる。一方で、フィールドワークを通し、当事者の経験や思いに触れたことで、啓発が人々の認識や価値観に大きな影響を与えることを実感した。

現代における啓発の意義と課題を検討した結果、以下のように考えられた。まず意義として、適切な啓発は人々が既存の偏見を見直すきっかけとなり得る。当事者の声や経験を社会に届けることで、これまでの先入観を見直し、偏見や差別について考えるきっかけとなる点が挙げられる。

一方、伝え方によっては当事者に対する見方を特定の方向へ固定し、かえって偏見を強化してしまうという課題がある。また、啓発のために当事者自身に経験を語ってもらうことは、当事者に精神的・社会的負担をもたらすおそれ

がある。さらに、啓発が一方向的な「正しい知識の伝達」にとどまる場合、受け手はその内容を批判的に吟味することなく受け入れてしまう可能性がある。

このように、啓発は偏見の解消に向けた重要な手段である一方で、そのあり方によっては新たな偏見や負担を生み出す可能性を併せ持つことが明らかとなった。

以上を踏まえると、今後は、「何を伝えるか」だけでなく、「どのように伝えるか」「どのように受け取られるか」を重

視した啓発が求められる。

【指導教員】 医学部医学教育学教室 助教 三枝七都子

#### 参考文献

- 1) 国立ハンセン病資料館(更新日不明), ハンセン病について, <https://www.nhdm.jp/about/disease/>2026年3月20日閲覧
- 2) 国立ハンセン病資料館(更新日不明), ハンセン病問題について, <https://www.nhdm.jp/about/issue/>